

7年産米集荷価格 3万円超えが続出

業務用向け含め高値拡大

農協系統組織による令和7年産米の概算金など集荷価格の提示が全国でほぼ出揃った。新潟コシヒカリ・秋田あきたこまちなど主要銘柄は60% 3万円に到達し、前年産をゆうに1万円以上も上回る大幅な引き上げが続出している（下表参照）。集荷の競合が主な要因だが、末端では随契備蓄米の2倍以上となる5% 4000円台前半～5000円超の販売が見込まれ、東北産米の本格的な出回りを迎える中で店頭での売れ行きが順調に進んでいくか、不安要素が否めない。

集荷価格が3万円に到達した産地品種銘柄は、新潟一般コシ・秋田こまちなどスーパーで定番の銘柄米に加え、業務用でも使用されることが多いとみられる青森まつしづら・栃木コシなども含まれる。早期米産地の宮崎コシのほか、関東で出回りのトップを切る千葉産のコシ、これに続く茨城コシの買取価格が、農協によっては最高3万2000円、3万5000円にも沸騰した。

今年2月末に早々と全農新潟県本部が一般コシで2万3000円という仮渡し価格の最低保証額を提示し、次いで5月には目標額として2万6000円に引き上げをアナウンス。3月は新潟に続いて東北や北陸などの主産地でも、保証価格や目安価格を早期に提示する動きが相次いだ。生産者に出荷意欲を促すため早期に集荷価格を提示する試みは、系統外の播種前・収穫前における生産現場との商談、“青田買い”にも刺激を与えた。結果的には、出来秋の集荷価格を押し上げる方向に作用することになったとみられる。

コロナ明けの業務用需要の回復や精米歩留りの低下、南海トラフ地震情報などによって5年産の売価が高騰し、その流れを次いで6年産の実勢価格も3万円台で推移。農水省の2年連続にわたる需給予測ミスによる数十万トン規模もの需給ミスマッチも発覚した。60万トンを超す入札・随契備蓄米の放出も、品質チェックや物流の不備によって末端にはまんべんなく行き渡らず、二重・三重の行政ミスが高騰を下支えする図式になっている。

主産地における7年産作柄や品質（歩留り）状況、作付転換による56万トンにも及ぶとされる生産増に加え、外国産米のSBSと民間輸入の増加、5% 4000～5000円台の精米価格に対する消費者の反応など、需給を左右する要素が多い。優位に進んできた商人系集荷も、倉庫の限界から今後は系統集荷に分があるとの見方もある。

7年産米の主な産地品種銘柄の概算金・仮渡し価格
(特記がない限り JA 米、1等、60kg 当たり円、税込み)

産地	品種	価格	前年産差	備考
北海道	ななつぼし	29,000	+12,500	ホクレン→JA
青森	まつぐら	30,000	+15,000	JA→農家
秋田	あきたこまち	30,000	+13,200	全農→JA
山形	はえぬき	28,000	+11,500	全農→JA
宮城	ひとめぼれ	28,000	+11,500	全農→JA
福島	中通ひとめぼれ	28,000	+10,800	JA→農家
茨城	コシヒカリ	30,000	+12,000	全農→JA
	コシヒカリ(買取)	32,500	+7,100	JA→農家
	あきたこまち(買取)	33,000	+9,200	JA→農家
栃木	コシヒカリ	31,000	+14,700	全農→JA
	あさひの夢	27,200	+11,700	全農→JA
千葉	コシヒカリ	25,800	+10,000	全農→JA
	ふさこがね	24,000	+8,700	全農→JA
	コシヒカリ(買取)	30,285	+8,535	JA→農家
新潟	一般コシヒカリ	30,000	+13,000	全農→JA
	魚沼コシヒカリ	32,500	+13,000	全農→JA
富山	コシヒカリ	26,000	+10,000	JA→農家
福井	コシヒカリ	29,000	+11,800	JA→農家
	ハナエチゼン	28,000	+12,000	JA→農家
三重	一般コシヒカリ	29,000	+12,000	JA→農家
滋賀	コシヒカリ	29,450	+12,150	JA→農家
島根	コシヒカリ(1.9 等上)	28,400	+11,600	JA→農家
高知	コシヒカリ	22,000	+7,200	JA→農家
宮崎	早期コシヒカリ(第2期)	32,000	+12,400	JA→農家

(注) ①「JA→農家」は、農協から農家への支払額（生産者概算金など）②「全農（ホクレン・県連）→JA」は、道県から JA への支払額（JA 概算金など）③JA 独自加算、時期別設定、品種別設定などにより異なる場合がある④茨城産・千葉産の買取価格は複数 JA の中間値⑤滋賀産は複数 JA の中間値。